

井上円了とカント

井上円了とカント —— 哲学堂におけるカント ——

馬場 喜敬^{よしゆき}

付 (a) 「星界想遊記」繙読

(b) 「南半球五万里」追遊行

井上円了とカント

—— 哲学堂におけるカント ——

1

井上円了（安政五年¹¹一八五八年¹²大正八年¹³一九一九年¹⁴）とイマヌエル・カント（一七二四年¹⁵一八〇四年¹⁶）との深い絆は、円了が明治三六年（一九〇三年）、中野区江古田に「哲学堂」を建立し、その本尊に「南無絶対無限

尊」の名を与え、そこに「インド哲学の釈尊佛陀、中国哲学の孔子、ギリシャ哲学のソクラテス、近世哲学のカント」の四聖を祀った一事に端的に示されている。これは明治一八年にはじまる哲学祭の最終的な結晶でもあった。世にいういわゆる四聖（ソクラテス、イエス、シャカ、孔子）と異って、カントが、円了において、四聖の一人に列していることは、その絆の並々ならぬことを語るものといわねばならない。

ここに至る道筋を少しどってみよう。

円了は仏門の出（新潟県・慈光寺）であるが、つとに、哲理において、すなわち真理の相から広く宗教や思想をみようとするの念強く、漢学、仏典、洋書をひろく読んだ。その上にヨーロッパ哲学が受容された。明治一一年（一八七八年）九月、予備門に入学した円了は、赴任（明治一八年八月）早々のハーバード大学出身の若きフェノロサ E・F・Fenolosa 講師の講義をきく機会に恵まれた。「デカルトからカント、ヘーゲルにいたる哲学史」をはじめ、フェノロサは「ミルの経験と実証、スペンサーの不可知論、コントの実証的な社会論と創造的な人道論、ソクラテスの無我中道的な実践哲学などを円了の若い心に注ぎ込んだ。」（宮本正尊「明治仏教の思潮——井上円了の事蹟——」一九七五年、佼成出版社）。

この土壌の上に、明治一五年、円了は学友たちと「哲学研究会」を発足させ、「カント、ヘーゲル、コント」研究に取り組んだ。この発展は明治一七年の「哲学会」の創立であり、二年後（明治一九年）には「哲学雑誌」の創刊に至る（巻頭の言を執筆して「哲学の必要」を論じ、「万学の礎としての哲学」を強調している）。

最近の資料によれば、円了が読了した哲学書は約一〇〇冊、著者にして約七〇人であり、そのうちカントに関するものは次の二つである。

E. Caird (1835-1908) : ——

The Critical Philosophy of Kant, 1889

A. Schwegler (1819-1857). —

Handbuch der Philosophie (in English)

「哲学研究会」におけるカント研究が原典に即した体系的なもの、網羅的なものであったかどうかなどの検討はなお今後の問題であるが、右によってみれば、多分にケヤード的イギリス新カント派的な読み方がなされたであろうことは想像される。

またマックス・ミュラー Max Müller (一八二三年—一九〇〇年) はインド学者(「リグ・ヴェーダ」を訳した「東方聖書集」を出版)であるが、一方でカントの「純粹理性批判」の英訳を刊行した。ミュラーの高弟となつた哲学館出身の笠原研寿を通じ、この英訳書を座右においていた円了は、持続的にカントに接したであろう、その脚注などによってミュラー的なカント解釈にもふれたであろう。

英文ノートにおける読書メモを一瞥すればカントの倫理に関して次の一節がある。

His position with respect of happiness is peculiar. Happiness is not the end of action. The end of action is rather the selfassertion of the rational faculty over the lower man. (幸福に関するかれの命題は独特である。幸福は行為の目的ではない。行為の目的はむしろ低次の人間性を克服して合理的能力による自己実現である。)

これだけに関していえば円了がカントのいわゆるリゴリスムス的道德哲学に斜傾していることがうかがえる。モは第一批判をいわば素通りして第二批判への親近感を強めている。頭上の満天の星、その星辰の世界を貫く法則への畏敬と、それと等しき道德律(法則)が己れの胸中に宿ることを信じたカントに、人間の崇高性の体現をみる方向である。これが新カント派的〈読み方〉ということでもある。

以上、円了とカントの深い絆—カントを哲学堂の本尊をなす四聖の一人となすほどの深い絆への道筋の見きわめは、まだ充分とはいえない。

転じて、円了の社会的実践の本領を示す最初の記念碑的著作「仏教活動論序論」(明治二十年—一八八七年)をみる。カントはどう位置づけられているか。

ここに仏教の原理の西洋哲学の原理と相合する所以を示さんと欲し、仏教中哲学に属する部分、すなわち聖道門の組織を略言するを必要なりとす。そもそも西洋哲学はいかなる諸論をもって組織せるや。いわく、唯物・唯心・唯理……主観・客観・理想……経験・本質・統合……空理・常識・折衷……一元・二元・同体の三論なり。これを哲学の歴史に考うるに、初めにロック氏経験論を唱え、次にライプニッツ氏本質論を唱えたるをもって、終りにカント氏これを統合するに至り、ヒューム等の学派は唯物に偏するの傾向あり、ベルキュリー等の論は唯心に偏するの傾向あるをもって、リード氏この二者を折衷して物心二元論を起すに至り、フィヒテ氏は主観を取り、セーリング氏は客観を取るをもって、ヘーゲル氏理想論を唱えて又二者を調和し、ゼルマン学派は空論に偏し、スコットランド学派は常識に偏するをもって、この二者を統合したるものフランスのクーザン氏なり。スベルセン氏また可知と不可知の両端の一方に偏するの弊を恐れて両境を立つるなり。近世哲学の全系けだしの諸説のほかに出でず。しかしてその説各論理の一端に走り、学者その中正を保持せんと欲して、いまだその目的を達成すること能わざるなり。

円了はかくのごとく、カント哲学(認識論)を、かれの絶対境の立場(中道)の真理からみて、それへの一過程に位置するとみるにとどまっている。またドイツ学派、スコットランド派、フランス哲学など拉し来ってその比較まで試み、西洋哲学はさながら足下におどる部分的真理舞踏の場である。

なお「仏教活論序論」に先立つ「哲学一夕話（明治一九年）を一瞥する。これは一種のプラトンの對話篇の形式を内包し、「物心両界の關係」「神の本性」「真理の性質」について、既往の諸説に論評を加えながら「哲学の正道」を歩ましめようとする情熱にあふれた著作である。この点に「仏教活論序論」との共通点もっている。しかし、この中にカントがどのように生きているかは見定めにくい。「円了四聖論におけるカント」のためには、むしろ哲学祭そのものにふれた円了の直筆に赴くことにする。

2

井上円了による「哲学祭」の挙行に、西周以降日本におけるヒロソ、ヒの発展の一つの相をみる。（西周「百一新論」のヒロソヒから約十年である。）

以下は明治二六年十月二七日に催された哲学祭の祭記。

「古来我民間の習俗として医士は神農を祭り、学童は菅公を祭り、大工職人に至る迄或は聖徳太子を祭り、或は恵比寿大黒を祭り、以て其余徳の今日に及ぶものを報謝せんと欲するなり。就中宗教家にありては各宗各派皆祖師開山を祭りて報恩謝徳の意を表す。……今余輩は哲学を専修するものなり、只今東西の哲学者中其世に著名なるもののみを挙ぐるも百を以て数へざるを得ず、其学説其著書今日に存する者幾萬巻あるを知らず……余輩之によりて知識を進め道理を明かにし、無智世界の暗夜に立ちて恐れず、不徳社会の霧海を渡りて迷はず、其心常に歎天楽地の中に安住するを得たり。果して然らば余輩の先聖古賢の恩義を辱うするや実に深くして且大なりと謂ふべし。是れ我世間普通の習俗に考ふるも報謝の意なかるべからざる所以にして哲学祭の設ある誠に慈に

起因す……余自ら古今東西一種無類の祭祀法を工夫し、東西兩洋の哲學者中より四大家を選抜し之を數百の哲學者を代表する者と定め、明治十八年十月二十七日初めて其祭典を試みたり。

其四大家を選定したるは決して私意に出づるにあらず、當時哲學を大別して東洋哲學西洋哲學の二種となし、西洋哲學を古代哲學近世哲學の二種となす。……此四種の哲學は其發達の形式恰も倒に懸けたる扇面様の外見を示し、扇柄の枢要に當るものは支那にありて孔子、印度にありて釈尊、古代にありて瓊克刺底氏(ソクラテス)、近世にありて韓圖氏(カント)なり。此四氏は皆哲學の中興にして其以前の哲學を統合し來りて一大完全の組織を開き、以て後世の哲學の基礎を置きたる者なり。其以前の哲學は短且つ小にして以後の哲學は長且つ大なり、其形左の如し。



甲は以前を表し、乙は四氏を表し、丙は以後を表す。……詩人必ず歌て言はん、扇面倒懸哲學天と。……近世哲學も亦前後二世紀に分れ韓圖氏を以て中興とす、韓氏が前世紀の諸説を總合概括して後世紀哲學の源を開きしより以來、諸學諸説の多岐多端に分れたる事前世紀の比にあらず。故に以上の四氏は扇面的哲學の枢要の點に當れる人なり。……

唯一の難點は紀年及祭日を定むるにあり、然るに余亦一案を工夫し四氏の年壽を合算して之を日に配し以て祭日を定め、又四氏の年曆を平分して以て祭日の紀年を定めたり、其表左の如し。

誕生

入滅

壽

距明治十八年

積尊	紀元前一千零二十七年	同	九百四十九年	七十八年	二千八百三十四年
孔子	紀元前五百五十一年	同	四百七十九年	七十二年	二千三百六十四年
瓊氏	紀元前四百六十九年	同	三百九十九年	七十年	二千二百八十四年
韓氏	紀元後一千七百廿四年	同	一千八百零四年	八十年	八十二年

壽數合計三百年之を日に配して三百日となし、之を一年の上に追算するときは十月二十七日に當る。

以上、「祭祀」の要点は次くごとく把握される。

- ① 哲学「祭」もまた日本における祭の精神、感謝・報恩の念に発すること。
- ② この新たな祭は哲学祭において一種無類の祭祀法を考えざるをえなかったこと。
- ③ 四大家―四聖の選定の法。いわゆる四聖と異なる四聖の選抜の根拠について。
- ④ 祭日をいかに定めたか。

冒頭先ず「我民間の習俗」からはじまり、その意義を掘り起して哲学「祭」をとり行う主体の意識におよぶ。―それは簡にしてかのヘーゲルの「精神現象学」の世界を彷彿させる。ヘーゲルの精神現象学は習俗(Sitte)に己れを見出し、その「知」を媒介に自己を習俗の地盤である歴史的世界の主体として自覚するものであるから。

哲学祭は「我が習俗」に根差しつつ、新しき祭である。そして祀られるべきは東西哲学の代表者、新しき四人。孔子、釈迦、ソクラテス、そしてカントがえらばれる。ここにおいてこの着想は、再び哲学史上に例を求めるならば、ヤスパースの「偉大な哲人たち」(第一巻)を彷彿させる。ヤスパースの「偉大な哲人たち」は独自の哲学史の

構想を内包しつつ、哲学者をグループ別化して論ずる異色の哲学者列伝ともいえる。その選択の幅は従来へのヘーゲル、K・フィッシャー、ヴィンデルバント、シュベグララーらの哲学史の枠をこえて、まさに洋の東西の及ぶ。最初に論じられるグループは「四人の基準をなす人たち」die vier maßgebenden Menschen とよばれる、孔子、釈迦、ソクラテス、そしてイエスである。前三者は、円了の四人のうちの前三者と一致する。かれらは、ヤスパースが別の著作「歴史の起源と目標」(一九四九年)において車軸時代 die Achsenzeit とよんだ時代に生きた。そして夫々の地で精神革命の担い手となった。ヤスパースに先立って円了は、扇形の要にこの三人を配し、簡にしてヤスパースの着想を先取りしている。カントはヤスパースにあつては二番目のグループ「哲学することを次々と生み出しつつ根拠付ける者」のなかにあらわれる。このグループには三人があげられる。プラトン、アウグスチヌス、カントである。円了はこの点においてヤスパースと異なるが、歴史性を捨象してカントを前三者と同列化したことに円了の独自の哲学史観をよみとることができる。

哲学祭という祭の日を定めるのに、任意のものとしなないための真剣な考察が試みられたことはまことに興味深い。〈十月二十七日〉は年毎に慣習的な重みを増してきたし、今後も増しつづけるであろう。ここにおいて再び哲学史上の類例を求めれば、デカルトの知的啓示の日につき当る。これこそは単にデカルト個人の夢の日付けであった(一六一九年十一月十日)。三つの断続的な夢が一つの意義付けを与えられて、近世合理主義の起点となった(cogito, ergo sum)という命題と血脈を通じ合うようになったのは本来きわめて矛盾撞着を感じさせられる事柄である。これが今日哲学史に記されるに値するならば、十月二十七日も同様にか、或いはむしろ哲学本来の意図において「思想の暦」を飾ることになろう。

以上、少々意図的に「祭記」をよむに、ヘーゲル、ヤスパースなど西洋哲学者の観点の投入を以てし、円了の直

觀的把握がこれらの核心的部分と軌を一つにし、且つ簡にして要をえたる表現となっているのをみた。先にもべたように、日本のヒロソヒは、西周の当初期での、西欧のヒロソヒを憧憬する段階よりすでに脱け出づるに至っているのである。

なお次は明治三十年十月二七日哲学祭の「祭文」である。

後学円了等謹て四聖の尊像を講堂に掲げ、大学中庸論語易經法華經淨土三部經瑣克刺底伝記純理批判哲学各一部を其前に供し、仰で尊容を拝し俯して遺教を思ひ、以て先聖釋迦孔子瑣克刺底韓圖の四大家を祭る。釈迦は印度哲学を：孔子は支那哲学を：ソクラテスはギリシャ哲学を：カントは近世哲学を代表す。故に四聖其人を祭るの意は哲学其物を祭るにあるを知るべし。

夫哲学は一種の別世界にして、其中に天地あり日月あり、風雨あり山海あり、釈迦の智は其所謂日月なり、孔子の徳は其所謂雨露なり、瑣克刺底の識は其所謂山岳なり、韓圖の学は其所謂海洋なり。其智は我を照し、其徳は我を潤し、其識は我を護し、其学は我を擁し、我父となり我母となり、君主となり師友となり、日夜我を愛育撫養せり。

是を以て不肖円了等幸に哲学界の一人となるを得たり、我輩豈に報謝せざるべけんや。四聖の順序は釈迦を第一に位し、韓圖を最後に置くは姑く年代の前後に従ふのみ。

今処に祭日を定めて祭典を挙ぐるは其意四聖の餘徳を追慕し師父の厚恩を感謝するにあるも、亦他に期する所なきにあらず。我輩己に先聖の撫育によりて学界の一成童となるを得たれば、是れより我先聖に対する義務として更に後進の子弟を啓導して此哲学界裡に誘入し、之をして別天地の風雲山海の間に逍遙浴詠せしめざるべからず、

是れ不肖円了等が先年哲学祭を設けて其学の将来益振起発達せん事を祈るの微志にして、即ち四聖其人を祭るは哲学其物を祭る所以なり。

以上、「祭文」は「祭記」における円了の思想を補強している。とくに四尊に奉献された「聖典」のなかにカントの「純粋理性批判」があることに注目しよう。

3

円了のほか、カントはどのように日本に受け入れられたであろうか。このいわゆる「日本におけるカント受容史」には、西周、井上哲次郎、井上円了、中島力造、清野勉、大西祝、金子馬治、波多野精一、桑木巖翼、朝永三十郎、西田幾太郎、紀平正美、田辺元、安部次郎、安部能成、天野貞祐、得能文、山内得立、山口諭吉、朝永三十郎、大西克礼、三木情、和辻哲郎、その他の名があげられる。とりようによれば、日本の思想家は分野を問わず多かれ少なかれカント受容にかかわっているといえるであろうし、また前記の人々の中でも、カント以外の名、例えばパスカルやデカルト、ヘーゲル、シュライエルマツヘル、ニイチェ、フッサール、或いはオイケン、ベルグソン、ジェイムズなどについて西洋哲学受容史の一頁を担っているとみた方が適切ともいえる。そしてこのような「近代日本における西洋思想受容史」の研究は今日はやりの分野となっており、「井上円了とカント」というときも、あたかもそうした研究の一部をなすものとみなされがちである。例えば時代を同じくするもう一人の井上、すなわち井上哲次郎と比較して、両者のカント解釈の良否、深淺が論じられたりする。両者に共通の「現象即實在論」がもち

出され、何れがカントの本意に近いか、さらには西田幾太郎のカント理解との^{（近）}距りが何れが大きいか小さいかなど。こうした議論ももちろん必要にして有益であろう。しかし「井上円了とカント」はもう一つの面をもつ。とは比較思想・比較文化的方法を指示する。またトマス・マンが「ゲーテとトルストイ」などで愛用した「と」に通ずる。要するにわれわれにとつての「井上円了とカント」を考察することを許容し、且つ推奨する。円了が「純粹理性批判」を通読したか否かには頓著せず、円了が同書を奉獻した故事にも鑑み、「井上円了とカント」を「妖怪学講義」（六巻）と「純粹理性批判」との対比に限定して点描する。

(a) 純粹理性批判の主旨に関してはカント自身に語ってもらうことにする。

純粹理性の批判的原則から生ずる積極的効用について「自由に関する」究明は、神の概念及び心の單純性の概念に関してもなされうる。……すなわち私は、もし私が同時に思弁的理性から過大な知見に対するその越権を奪い取らないならば、神、自由、および永生を私の理性の必然的実践的使用のために想定することさえもできないのである。なぜなら思弁的理性がその知見へ到達するために用いねばならない原則は、眞実には可能的経験の対象に対してのみ十分なのであり、にもかかわらず経験の対象たりえないものへ適用されるならば、實際いつでもこれを現象に変化し、そして純粹理性のあらゆる実践的擴張を不可能であると宣言するものだからである。

すなわち私は信仰をあげるために知識を取り除かねばならなかったのである。そして形而上学の独断論、すなわち純粹理性の批判なくしてなんらかの成功を形而上学において収めようとする偏見は、道徳性に反対し、かつつねに甚しく独断的であるところのあらゆる不信仰の源泉である。……ひとり批判によつてのみ唯物論、Materialismus、宿命論、Fatalismus、無神論、Atheismus、自由思想的無信仰、Unglauben、感蕩的信仰、Schwärmerei、迷信、Aberglaubenのごとき公衆に害毒を及ぼすことのありうる種類のもの、および觀念論

Idealismus、懷疑論 Skepticismus のごときむしる学派にとって危険で公衆の中へ滲透することは容易でない種類のものにいたるまで、その根までも刈り取ることができる。

以上は有名な「第二版の序文」(一七八七年)からのものである。第一版が公刊されたとき(一七八一年)、この長大重厚の難解な書物を前にして、M・メンデルスゾーンでさえ、「あらゆるものを破壊するカント」の印象をうけた。カントはいま批判の真意を右の如くうたう。

(b) 妖怪学講義の緒言はいう。

美妙なる天地の高堂に坐して靈妙なる心性の明燈を點する者は何そや誰れも問はずして其人間の一生なるを知る果して然らば其一生中森然たる萬有を照見するものは実に心燈の光なり而して其光を養ふものは諸学の油なり故に諸学漸く進て心燈漸く照し心燈愈明かにして天地愈美なり吾人既に心燈を有す豈諸学の講究を怠るへけんや是れ余が先年妖怪学研究に着手したる所以なり、……今日の文明は有形上器械的の進歩にして無形上精神的の發達にあらず、……若し此愚民の心地に諸学の鐵路を架し智識の電燈を點するに至らば始めて明治の偉業全く成功すと謂ふへし而して此目的を達するは実に諸学の応用就中妖怪学の講案なり国民若し果して是によりて心内に光明の新天地を開くに至らば其功毫も外界に於ける鐵路電信の架設に譲らず。

妖怪学：は妖怪の原理を論究して其現象を説明する学なり。……妖怪とは何そや。……仰て天文を望めは日月星辰秩然として羅列するもの一として妖怪ならざるはなし俯して地理を察するに山川草木鬱然として森立するもの又悉く妖怪なり風の蕭々として葉上に吟するも水の混々として石間に走るも人の相遇ふて喜び相離れて悲むも怪中の妖怪中の妖ならざる莫し、……空間其者の何たるに至ては実に人智の及ばざる所にして是れ亦一大怪物な

り、……小にしても大にしても妖怪其両岸を築きて人をして其外に出づることを能はざらしむ是れ実に真正の妖怪なり而して其間に架したる一條の橋梁は即ち人の智識なり学者此橋上に立て愚俗下流の輩の頑石の間に蟠り迷て其路を知らざるを見て世に妖怪なしと断言するは其識見の小なるを笑はざるを得ず然り而して愚俗の妖怪は眞怪にあらざして仮怪なり假怪を拂ひ去りて眞怪を開き来るは実に妖怪学に目的とする所なり。

一つは西洋哲学に中でも格調高き古典中の古典、一つは円了の「お化け博士」の異名のもとともなった通俗の書、という見方が一般的であっただけ、志向の類似は注目されるであらう。

カントは青年時代、プロイセンの東のはずれ（ケーニヒスベルク）でワイマール周辺からのシュトルム・ウント・ドラंक Sturm u. Drang の文学的息吹をかぎとり、彼なりの疾風怒濤的活動を経験する。やがてフリードリヒ大王期に「啓蒙」理念への移行。外的には静かなカントの内面的なドラマのなかで、批判の「いばらの径」が自らの足によって切りひらかれつつ、踏みかためられていく。悟性による科学の論理の確立と、科学をこえた世界からくる人間の高貴なる使命、道徳的使命感への覚醒。著作の難澁な文体の底に人生論的、教育家的な何か、情熱といつてもよいようなものがにじみ出ること、いまのべたことからみれば当然かも知れない、——カントの著作を熟読していたロシアの作家にして自称アマチュア教育家レフ・トルストイがいみじくもこのことを証言している。

円了のシュトルム・ウント・ドラंकは明治維新期である。円了の多感な青春時代は、漢学（儒学）的伝統の動搖、洋学の多様、排仏毀積の暴風という混乱の渦中ですごされる。やがて鹿鳴館風啓蒙・明六雜誌の啓蒙の軟風があらわれるが、円了にはこれらは克服されるべき段階におもわれる。「仏教活論序論」でうたわれた「護国愛理」は、かれの人生論的体験になかで眞の哲理へと昇華しつつあったとおもわれる。かれは「官学」の狭さに躊躇でき

ない。「田学」者として、また空海を範とする仏徒の自覚において、「哲学実行者」として、かれは人々を眞怪に覺醒させ、妖怪にとらわれざる悟性育成の業に赴く。実に、「妖怪学は宗教に入るの門路にして教育を進むるの前駆なり」である。妖怪学は「理論と実践」の垂離を知らざる者のみが発想するであろう独自の内容の書物となった。

「井上円了とカント」はまさにいま始ったばかりである。「井上円了とカント」はこのテーマの投げかける問題点を次々とねばり強く探求していくであろう。その中にはカントについての再検討も含まれる（拙論「ポープとカント」「フィジオグラフィとフィジオゴニー」も暗示しているように。また最近の内外のカント研究のいくらかからも読みとれるように。とりわけ福鎌忠恕「カントの人間学」は斬新である。）。そして何よりも円了を正しく把握するに必要なパースペクティブの拡大・多様化への洞察である。先にいった「カント受容史の「こま」の中に円了を埋没させるのではなく、別なる系譜の中で円了を見直すことが望まれる。たとえば、漱石・稻造・諭吉と円了という構図で、あるいは南方熊楠・柳田国男と円了という視点で、などなど。——すなわちこの第二の「井上円了とカント」はいまはじまったばかりであるととも豊かな実りの期待される課題である。

付・(a) 「星界想遊記」 繙読

1

四聖堂主人・井上円了著「星界想遊記」という小著。一頁二三×一〇〇〇字にして一〇七頁におさまって

る。題言にある如く、円了が「豆州修善寺温泉入浴中青州樓客舎ニアリテ一夕夢中ニ現出シタル空想ヲ叙述セルモノ」であろう。その「一夕」とは翌朝に「数年来渴望したる明治二十三年」を迎える一夕、すなわち明治二二年（一八八九年）の大晦日ということになる。

明治二三年（一八九〇年）、その十月に教育勅語が發布され、十一月には前年二月公布の大日本帝国憲法に基づいて、第一通常国会の開会が行なわれた。そのほか、年表によれば、――

七月。全三年の課程を終了した「私立哲学館」卒業生二四名を送り出す。これを第一期得業生とする。

七月六日。哲学研究会を結成（会長加藤弘之、副会長井上円了）。機関誌「天則」を発行（のち東洋哲学会と改称）。

九月一六日。学年始業。

一〇月。井上円了の全国巡回始まる。

などとある。「数年渴望したる」ことがそれらのうちの何れであったか、或いは何れでもなかったか。また、あったとして、それはどういう意味で渴望されたのであったか、はここではまだ付度の時期である。

何れにしてもこの大晦日の夕、「往を憶ひ来を卜するに無量の思想心頭に集まり、感慨自ら禁ずる能はず独座沈吟時漸く移り夜漸く深く將に十一時に達せんと」して「四隣寂寥」「唯溪流の潺湲たるを聴くのみ」の時に、この書の一切の輪郭はととのえられたのであろう。

奥付によれば

明治二三年二月二日印刷

二四日出版

となつてゐる。

発想・執筆から印刷刊行までの間の短かいこと、当時の他の出版物と比べて格段のものがあつたと推察される。

1

この本は夢想であつて「学理ニ照シ實際ニ徴シテ考フヘキモノニアラス」と述べられているが「星界想遊」の発想は、カンパネラ、フォントネル、カント、シラノ・ド・ベジュラック、ボルテールなど、背景にこれら一連の作家の系譜がうかんでくる。円了がこうした系譜に明らかつたかどうかはともかく——四聖論にとり上げるカントに徴していえば、カントの「天界自然史」の書名は「妖怪学講義」に出てくる——、このような叙述形式は、モンテスキューの「ペルシャ人の手紙」以下の異国名を冠した文明批評と並んで、注目されてよい。すなわち「夢想」といへどもその資料は学理の対象としてよいところから出ている。

一方「其末段四聖トノ問答ニ至リテハ空想ニアラスシテ实际的ノ論ナリ其論或ハ世ノ空想ヲ抱クモノヲ戒ムルニ足ルヘシ」に関しては、この空想に非らずの強調が、かえつて異にひびく。円了の「四聖」が、通常の「四聖」と異つて、孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四人であることはすでに喧伝され、その論拠は「支那哲学ニテ孔子、印度哲学ニテ釈迦、希臘哲学ニテソクラテス、近世哲学ニテ韓圖」という選択基準が有効であるように語られているが、これを円了の独創とみなしてよいとはいへようが、「空想」である方の内容以上に学理に適しているともおもわれない。そして実はこの飄々としてとらえどころないところがこの小著の魅力であり、この三二才の著作が、円了の本質をいみじくも濃縮している好著と化している。

2

円了三才の「星界想遊記」をカント三才の「天界自然史」と比較してみることは、東西両思想史の特色を瞥見する一助ともなろう。「コスモスとまんだら」という問題意識にもやがてはかかわるであろう。ここではしかし、カントの、特に第三部をとらえ、円了の遊想する星界とを、私のイメージの中でからませたいとおもう。

カントの「天界自然史」の第三部は、第一部、第二部とがらりと趣を異にする。この本のサブタイトルは、「ニュートンの諸原則に従って論じられた全宇宙構造の体制と力学的起源についての試論」とある如く、ニュートン哲学の提供した引力・斥力を以て全宇宙の構造と起源、すなわち諸恒星間の関係について、惑星形成の諸原因についてなどを説明しようとしているが、第三部に至って、諸惑星の住民について論じようとするカントの心のなかに、かの古典的・伝統的な宇宙の枠組、A・コイレのいい方では、存在の階梯と価値の階梯が一致、対応し、世界は全体として整然たる階層秩序を保っている「コスモス」である、がよみがえっているようにおもわれる。このことからして、A・ラブリョイも指摘しているように、A・ポープの詩句（「人間論」）が共感を以て引用されるのである。

如何なる鎖であらうか、神から初めをなす鎖、何たる自然の数々であらうか。

天界のもの地界のものから、天使、人間から禽獣にいたるまで、

六翼の天使長から虫けらにいたるまで！

おお、その広さ、眼もあえて届かず見るをえず、

無限なるものから汝へ、汝から無へと！

こうしておいてカントは、諸惑星の住民についておもいめぐらす。どのような形状をもっているかは推測しがた
いといい、フォントネル風の断言とはほど遠いが、理性的存在者がいること、それも太陽の引力の支配が強くない
に応じて度合いの高い理性的存在者がいるであろうという「幻想」に信頼をおこうとする。フォン・ハラーの詩が
これを助ける。

星辰こそおそらく光輝ある魂の座であらう、

地上に悪徳の支配するごとく、彼処かしこでは徳こそ主あまじである。

円了「星界想遊記」は「瞬時にして遠く蒼々茫茫たる天界」にいたり、そこに共和界、商法界、女子界、老人界、
理学界、哲学界を見出し、そのの住民と多種多様な問答を交わす。その自在さは天界に遊びうる人間の心の自在さ
を反映している。

共和界といい、商法界、女人界といい、あえて思想上の対応物を求めれば、おもい当たるものがないわけでは
ない。

共和界ではプラトンのポリテイア (Politeia) が、商法界では近代的経済的自由主義すなわち資本主義国家の安い
政府論 (cheap government)、女子界ではバッコウフェンの「母権論」などであろうが、余り対応性がないとするな
らばむしろ二十世紀末の今日の「婦人問題」思想の極限が先取りに語られている。老人界では中国の老荘思想の
変形(?)か、理学界ではコント流社会発展段階論乃至H・G・ウエルズやオルダス・ハックリシーなど二〇世紀
に入ってから科学技術主義に基づく社会観・国家観がうかんでくる。

しかしこのような対応探しに躍起になると、各界夫々が背負っている歴史の長さ、その年数の天文学的なには度胆をぬかれてしまう。各界夫々が、現状の典型的な姿、M・ウェーバー流の理想型 *Ideallype* に達するまで大変な年数が経っているのである。

共和界では一八九万六、七〇〇年（そしてこの近世は一二万五、〇〇〇年前）、商法界は三五万二、五〇〇年。女子界五万九五七年、老人界に至っては、建国の年数よりも当代の帝王の年令四〇万〇〇五六二日（年数に直して約一〇九六年）がすでに桁外れである。理学界もまたさらにおどろくべく二億四、〇〇〇万年である。読者はおもわず、ハムレットがヨーリック卿の頭蓋骨に向かって「お前の奇想は天涯だった……」といったときと同じ心境に至っているであろう。

各界歴訪の想像子（円了）は各界の一長一短に魅せられたり失望したりする。

共和界はかのプラトンのポリテイアの一面を現している。男に一定の妻なく、女に一定の夫なく、女子は男子の共有物、男子は女子の共有物、唯一時の結婚、一夜の夫婦によって子孫をつくる。子供は産院にて生まれると育児院にて養育され、ついで小学・中学をへて成人となり、社会に出て職業につく。一町一村にこの四公共施設のないところはなく、これらはみな国の租税で維持され、租税は二〇才から五〇才の国民によって負担される。

このように子孫・家族の繋累のないことが自利自愛の私情を斥け、社会公衆のために尽す心を育成するに役立つ。それには死後の名譽の觀念も加わる。また私有財産は、ポリテイアとちがって、個人に帰し、個人の活動意欲を支えている。

しかし、ここにはポリテイアの哲人王の理念はみじんも現われず、また総じて人間の豊かな精神性を媒介とする社会生活が感じとれないのである。政府の法律というものが鉄のような意志で全体をおおい、成員を拘束している。

想像子ついにここは留まる地に非ずと去ることを決断する。

商法界に来てみれば、右のような鉄の法律はない。代って天命天運を以てする。但し、天命天運の何たるかを弁ずる組織として決連組織があり、これが多少政府の如き性質を有つ。虚礼を去りて実業を重んずる社会、冠婚葬祭の如きも廃止してしまっている。しかしこれはまた余りにも“人情”に反する。一長ありて一短もあり、と想像子はここにもまた別れを告げる。

女子界。明治憲法における選挙権なき女性、旧民法において男性の戸主権が絶対で、妻は無能力者という規定によって財産の相続権も否定されていた近代国家という名の日本の社会を、ここから眺めれば、ここは一大革命の成就された別天地であつたであろう。君主も女性、学校の教員、医士、会社の事務員みな女性。男は力役労働にのみ適するとされている。その昔男子政權時代なるものもあつた。しかしこの野蛮時代は夙に終わり、文明時代と同義の女子政權時代がここでは久しく繁栄をつづけている。一長と一短といったが、ここでは一長とは果たして何か、後者のみではないか、と想像子は頭をかかえている。

老人界にきてみれば、これはまた不思議な光景をみる。「此国の風習老人を尊敬すること君主の如く天神の如し。其政軀は老人政軀にして老人に非ざれば政府に就職する能わず」且つ帝王はつねに最老の人である。女子界と正反對に「男と女とは全く其階級を異にし、男は上にして女は下なり」なのである。「女中の長寿第一の者と男中の幼稚第一の者とを列するに女は男の下に立たる可からず。」ここは国土は三〇〇億方離（一離は人の通常の歩行にて一時間に達し得べき距離。凡そ我一里に当る）と広く、人口五〇〇億という。一超々大国を強力無比の政府が統治している。そのためには二億の兵隊と五、〇〇〇万の巡查を常置しているのである。

これはもう人間の社会というより、铁塔の如きアリ塚を築き、ひたすら盲目の運命に服して生存するシロアリの

姿同然である。想像子が早々に去ろうという気持もいたくわかる。

理学界は一見仙境の如き印象であった。よくみると空に驚車あり、海に鯨船があつた。これは生物の力を利用した飛行機と船と比べてよく、こうしたものを考案した知能の持主であることがこの住民の特性であつた。かれらは機械をも多く工作し所有していた。一般に「面貌老士に似て身体矮小童子の如く」、頭部のみ濶大している。ここには政府なく政体なく、代つて学校の組織がある。小学・中学・大学。大学は一国一天下の教育政治を統轄する。教官は職員を兼ね、職員は教官を兼ねる。最高位は大学老である。これはまた學上とも称し、この国土の君主である。この点プラントのポリテイアの哲人王の姿が變形してここに現れているようでもある。

一方で男女同等同権が実現しており、従つてこの国の人民は皆学者である。これらを一長とするならば、このように学問に向つて全住民の全エネルギー、体力も知力もが集約され、睡眠さえ無駄事として許されないことから、この住民の寿命はほぼ二七年半で燃えつきる。これはおそるべき一短である。

想像子理学界を去りて故国に帰んとするも故国は何れの邊にあるを知らず且つ想ふに天界必ず不死の国あるへし余豈空しく故国に帰ることをせんや願くは不死の国に一遊して其事情を郷国の人に告げん然かれとも天界広し大なり行かんと欲するも行く所を知らず去らんと欲するも去る所を知らず鵬天に逍遙して雲路に迷ひ無限の時間懸り無涯の空間に動き蒼々茫茫の間に翩々として舞ひ瓢々として浮ひけるに忽ち一仙士の忽然として空中に出現するを見る、……

哲学界への接近は、元來が「夢想」の中にあるとはいへ、このように偶然の導きによるものであつた。

ここにいう一仙士がやがて釈迦牟尼であることが明らかになる。それにとどまらず釈迦の周辺に三聖人が在ますことも見えてくるのである。円了がすでに、地上において、哲学堂を建設、祀った四聖である。想像子（円了）の歓喜は此の上なしである。

ところでここはいかなる星であろうか。これまでの五界、みな、風景の描写をまじえ、住民の姿態にも筆の及ぶことがあったが、ここではそうしたことは一切語られない。それもその筈、哲学界とは天界そのもの、形状ある特定の星であるのではない。

天界はどのように考えられているのであろうか。雲の峰の彼方の無涯の空間という表象が、Great Chain of Being（大なる存在の連鎖）すなわち連続的位階（階層）的宇宙（コスモス）を彼方に押しやっている如くである。

しかし天界は素朴な自然的表象を超えている精神界であることがすぐに明らかになる。

不死国を求めてきた想像子は天界こそ精神界すなわち不死国であると教えられる。

不死ということでは、カントが「天界自然史」のち約三〇年「純粹理性批判」「道徳形而上学への基礎付け」「実践理性批判」で探ろうとしたあの三つの理念にゆきあたる。靈魂の不死、意志の自由、神の存在、という。

これらは理論的形而上学では解決不可能の問題であるとカントは断ずる。しかし実践的形而上学のなかで理論的不決断は揚棄されるのである。

この世界において、それどころかおよそこの世界の外においてすら、無制限に善いと見なされうると考えることのできるものはただひとり善き意志、der gute Willeのみである。——

という不思議な言葉（特に傍点）がきかれるが、この天界においてこの言葉は自明の理と化しているであろうか。不死国についての教えは先ず積尊によって語られる。

不死国は一定の国土なく一定の方位なく上下に亘りて際涯なく古今を貫きて窮極なく宇宙を以て国とし万界を以て家とし空間を以て礎とし時間を以て柱とし方位なきを以て方位とし国土なきを以て国土とす是れ不死国の不死国たる所以なり。

しかしこの融通無礙なる絶対境、自由境、直樂の境に永住しようとする者は、有形界すなわち地上の世界において、かの善意志に発する善行為を積み重ねなければならない。義務にかなった行為 *pflichtgemäß* でなく、義務から出ずる *aus der Pflicht* 行為である。そのようにしてはじめてこの無形世界、不死国、絶対境、自由境、真樂の世界に永住するという因縁成熟が期待されるであろう。

積尊は厳かに告げる。――

我れ汝に依嘱することあり我曾て汝の本土に在て法を説き不生不滅の涅槃界あることを示したるに其後の衆生生死の義務を盡さずして直に涅槃界に到らんことを願うものあり是れ所謂因なくして果を求むるもの焉そ其目的を達するを得んや実に汝の世界は苦界なり然かれとも其苦は即ち樂界に達する道なり請ふ汝記せよ苦は樂岸に達する船なることを苟も涅槃界に生ぜんとする志あるものは勇猛精進を守り快して懈怠すへからず汝若し本土に帰らは請ふ我に代わりて衆に告げよ。

ついで三聖人も夫々語り告ぐ。

孔夫人。

我れ汝の本土にありしとき世道人心の治まらざるを見て修身齊家の道を講し仁義道德の大本を説きしか其後人民私利に走り小慾に汲々として大道を忘るるに至れり是れ實に道德の罪人なり汝我か為めに記憶せよ道德の家には幸福の園池あることを人若し幸福の園池に遊はんと欲せば必ず道德の家に入るへし汝若し其土に帰らば必ず我に代わりて此言を衆人に伝へよ。

瑣夫子。

我れ汝の世界にありしとき時弊を矯正せんと欲し知徳の本髄を明らかにして之を研修するの必要を説けり汝宜く我か為に其道を弘むへし。

韓夫子。

我れ世の学者の論皆一方に偏する弊あるを見て之れを総合対照し中正完全の哲学を起せり汝宜しく我か志を継ぎて今日の学弊を矯正すべし。

私は再三、円了の四聖論に言及してきた。いまここで星界想遊記が四聖の各言を遺して去るに及んで、本稿もまた再び円了四聖論の特性におもいを新たにしたいとおもう。

明治以来、日本で四聖とは、孔子・釈迦・ソクラテス、それにナザレのイエスであった。「滝口入道」(明治二七年―一八九四年)「美的生活を論ず」(明治三四年―一九〇一年)などで文名を馳せた高山樗牛にもこの四人の「世

界の四聖」を光彩豊かに描いたものがあり、この観念は一般化していた。

昭和に入って、和辻哲郎もこの四人を、個別に克明に論じた。「原始キリスト教の文化史的意義」(イエス)「孔子」(孔子)「ポリスの人間の倫理学」(ソクラテス)「原始仏教の実践哲学」(釈迦)。その際この四人に通底するのは(人類の教師)という性格である。この四人は夫々中国・春秋戦国時代(孔子)、北部インド・バラモン文化の分裂期(釈迦)、ギリシヤ・アテナイ・ポリスの紐帯の弛緩期(ソクラテス)、小アジア・パレスチナ・ユダヤ教の混迷期(イエス)の如く、所と時とを異にし、夫々の宗教的文化的社会的伝統の中で育ち活動しつつ、すなわち特殊性の中で生きて、人間にとって普遍的なものを最高度に指教したのである(この意義の詳しい叙述は「孔子」の冒頭にある)。

このような四人に通底する特質を(人類の教師)という呼び方でなく、(四人の基準をなす人たち) *die Vier* *maßgebenden Menschen* とよび、この四人が広汎な哲学史(世界哲学史)ともいう)の枠組を決定付けていると考えたのがヤスパース *Karl Jaspers* (1883-1969) である。

第二次大戦を通してのヨーロッパの破局の中でヤスパースはこの考えを熟させたが、この場合、イエスと他の三人の時代のずれを取り上げる。歴史哲学的考察が基本にある。

ヘーゲルに至るまでくり返されてきた、「神の子イエスの出現が世界史の軸である」という考えは斥けられ、他の三人、ソクラテス、孔子、釈迦が、所を異にしながらも、奇しくも相前後して、新たな精神的覚醒を体現したBC五〇〇年頃に、車軸時代 *Achsenzeit* の意義をもたせる。ここに今日とくに明瞭に想起されるべき精神的起点がある、とする。

この両者の考察はともに一顧に値するものがある。しかし、和辻四聖論は視野の広さの割りには内的統一を欠き、

ヤスパース四聖論は車軸時代をいいつつ、潜在的にはキリスト教的伝統に重心をおく内的矛盾から解放されていない。

この両者が代表的に示すように、四聖論の人名は上記四人が一般的常識とされるものであるが、これに先立って、円了の四聖論、円了の哲学界の代表人物の四人はすでにみた通りである。そしていまや地上をはなれて天界に集い、われわれに実践的指針を与える。ここには単なる比較思想をこえた問題が暗示されており、また新たな比較思想を遂行すべくわれわれに課せられた問題が暗示されている。

*カンパネラ Tommaso Campanella 1568—1639

「太陽の都」 *Civitas solis* (1623)

シラノ・ド・ニルジュラック Cyrano de Bergerac 1619—1655

「日月両世界旅行記」

フォントネル Bernard Le Bovier de Fontenelle 1657—1757

「宇宙の多様性についての対話」 *Entretiens sur la pluralité des mondes* (1688)

ヴォルテール Voltaire (Francois Marie Arouet) 1694—1778

「ミクロメガス」 *Micromegas*

「哲学書簡／イギリスについての書」

Lettres Philosophiques ou Lettres sur les Anglais (1734)

モンテスキュー Charles Louis de Secondat Montesquieu 1689—1755

「ペルシヤ人の手紙」 *Lettres persanes* (1714)

カント Immanuel Kant 1724—1804

「天界の一般自然史と理論」 Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels (1755)

* * A・ポープ Alexander Pope 1688—1744

「人間論」 Essay on Man (1733/34)

A・コイレ Alexandre Koyre 1892—1964

「閉じた世界から無限の宇宙へ」 From the Closed World to the Infinite Universe (1957)

A・ラブジョイ Arthur Lovejoy 1873—1962

「存在の大きいなる連鎖」 The Great Chain of Being (1936)

(b) 「南半球五萬哩」追遊行

1

追遊行をかりにドイツ語で表わすとしたら nachreisen としたい。ドイツ人が解釈学 Hermeneutik の立場から創出した nachdenken, nacherleben (追思考・追体験) にならうものである。

「今回の南半球の周遊は二九七日間に五萬〇〇七十五哩を踏盡せし故、一日に一六九哩づつを急行したる割合なり、斯る電光的旅行なれば、精細の観察は到底望むべからず、只瞬間の間に余の眼窓に映じたる千態萬状を日記體に書き綴りたるもの即ち本書なり」と緒言にある如く、本書は門了三度目の外遊メモである。

すなわち、一九一一年（明治四四年）四月一日、横浜出帆、一九一二年（明治四五年／大正元年）一月二二日再びそこに帰りつく間のメモ、ほとんど技巧を加えぬ三〇〇余頁の一書である。また、

「南半球の旅行中に、便船の都合にて英国を經由し、歐洲を歴訪したれば、其紀行を本書中に加え、以て歐洲最近の実況をも読者に紹介することとなせり」

とあって、突然、本書の内容に、第一次大戦直前のヨーロッパの相貌がのぞかれる。

さらに、

「本書刊行の目的は、我同胞をして今概益々進んで南半球の別天地に活動せしめとする意に外ならず、今日の青年は埋骨豈唯故郷地、南球到处有青山の感慨あるを要す、苟も此感慨あるものは、自国を遊園とし、海外を工場とし、宜く遠く天涯萬里に向て雄飛活躍せざるべからず、国運發展の道も蓋し此れにあらんと信ず、若し此瑣々たる小紀行が幾分たりとも我同胞の海外發展を資するを得ば、大幸不過之なり」

という最後の段落を「明治四五年二月一日、著者誌」の文字とともに読む者は、瞠目を禁じえない。それは昭和六〇年代においてなお新鮮であり、予示された課題がまさに今日のものであることを知って、瞠目・驚異の念は一層高まるのである。

2

私はしばしばこの書をカントの「自然地理学」*Physische Geographie*と比較したくなる。

カントの自然地理学はカントの生前すでに編者があって広く読まれたが、厳密には著書というよりも講義の集大成である。周知の如く、カントは一七五七年以降、いわば自主講義の形で、ケーニヒスベルク大学の講座に「自然地理学」をもちこんだ。晩年カントはリンクに正式に編纂の承諾を与え、それは一八〇二年に公刊された。

講義の実況がこれによって明瞭に伝わってくるというものではないが、編纂された内容はきわめて組織的なもの

である。「序論」に述べられる認識論的言説はしばらく描き、具体的内容の範囲をみるならば、それは先ず、第一部、Ⅰ、水について Ⅱ、陸について Ⅲ、大気圏、というように、地球の大きさや形状、構成部分、海洋、大陸、それらを取りまく空の諸現象、その起源と原因などが語られ、Ⅳ、地球の大変動の歴史ということで、当時すでにビュッフォン Buffon (「自然の諸時期」) が手がけた問題領域にもふれている。

第二部、陸上の諸物について、では、Ⅰ、人間の観察、すなわちカントが別に人(間)種(族)論 (Menschen-*rasse* 論) で論及したことがらを土台にしつつ、さらに付け加えられるべきことがらが蒐められ、Ⅱ、動物界では、へアリストテレスの動物誌」的なひろがりのある材料が次々と記述され、好みにまかせて興味あるものを取り出すことになれば枚挙にいとまがなくなくなるであろう。それは、Ⅲ植物界について、でも、Ⅳ、鉱物界について、でも同様である。

第三部は、地域別特徴をとらえた各論となつて、地球上のすみずみまでがいきいきと眼前化される。ⅠアジアⅡインド(前インド、後インド、インド諸島「セイロン、モルディヴ……」、スンダ諸島「スマトラ、ジャヴァ、ボルネオ、セレベス、モルッカ」、パプア、シナ、日本、フィリピン群島、ペルシャ、アラビヤ、ロシア領土(シベリヤ、カムチャッカ、モーク……:アジアのトルコ)、Ⅱアフリカ(喜望峰……:マダガスカル島……:コンゴ……:エジプト、アピシニア)、Ⅲヨーロッパ(ヨーロッパのトルコ、ブルガリヤ、ギリシャ、ハンガリヤ、イタリヤ、フランス、スペイン、ポルトガル、スウェーデン、ノルウェー、ロシア)、Ⅳアメリカ(南アメリカ、北アメリカ、アメリカの諸島、氷海の諸地方)。

この広大な地域にわたる膨大な資料をカントはどうやって蒐集したか。最高速度が馬車の走さ(時速約五マイル)でしかなかった時代、舟航の便もおいそれと利用することのできなかった時代、カントにどのような方法(手

段)があつたか。カント自身の言をきこう。よく引用される「人間学」Anthropologie in pragmatischer Hinsicht (これもまた一七七二年から始められたカント自主講義の一つ。本としては一七九八年公刊)の一節であるが。

一国の中心をなす大都市で、そこにはその国の政府の諸機関があり、一つの大学(学問の開拓のための)をもち、またそれと同時に海外貿易のための位置をも占め、そのおかげで国の奥地から流れてくる河川を通して、さまざまの言語や風習をもつ遠方の国々とも交易をするのに便利であるような都市——たとえばブレーゲル河畔のケーニヒスベルクのような都市は、たしかに世界知をも人間知をも拡張するのにふさわしい場所とみなすことができる。そこにいれば旅行などはしなくても、これらの知識をうるることができるのである。

今様にいえば、「情報」の集まるどころという地の利をえたケーニヒスベルクに対する愛着と、それを活用することをえた自負の入り混じったことばであるが、要するにカントは自ら足を使うことなく、「椅子に坐って」「自然地理学」を創出したのである。あたかも人々をその場に臨ませる筆致(「語り口」といべきか)をたのしみながらのよう。——次の一節を見よ。

ペルシャ湾やそれに隣接する諸地方では、ケルマン砂漠を越えて吹いて来る風が、燃えるように暑く、赤い色をしている。それに有名なザミエル「悪魔の長」にほかならない。オルムズ島は指二本の厚さに塩が凝固しており、そのために非常に暑い。

カントの「自然地理学」を心にとめてから円了の「南半球五萬哩」をみると、静に対する動のイメージが絢爛と泡立ってくる。

四八年間にわたりあれを語り、これを語ってじっくりと集積された（ワインになぞらえれば熟成！）カントの「自然地理学」に対し、円了の「南半球五萬哩」は二九七日間、すなわち一年に満たぬ日々、平均およそ一六九哩の「電光的旅行」という濃縮した日程のさなか、ほとぼしり出た観察記録である。もとよりこれは静のカントが語った地球のすみずみまでの対象のすべてを蔽いつくしてはいない。が動の円了の眼光や想いはやがてそれらすべてに至らんとする勢いがある。またこれを紀行文学のジャンルとしてみると、それは決して芳熟の作とはいえない。漢詩・短歌を交えているが、紀行文学書たろうとしているのではない。ただ世界に喰い入ろうとする主観が時に詩歌の心を発動させるのである。学術的な調査報告というには万遍なく組織的な記述というものではない。しかし現にその場に居合わせての筆致には息づかいが伝わってくるような特異の力感がある。乾燥仕切った風土のもつ峻烈の気、多人種多民族の行き交う巷のざわめきとなりわいなど、すなわち自然と文化の諸相が、行間に写真のネガの如く浮上する。それは一層想像力をかき立て、強烈な印象を読者の心に灼きつける。五萬哩の *nachreisen* は刺激と緊張と興奮にみちたものである。

○
横浜はすでに海原の彼方である。

香港入港。香港の夜景は海上より一見するに全市萬燈中に埋めらるる趣あり。山媚水明に加ふるに此夜景を以てし、大いに吟情を動かす。

香港の山につつける電燈の光りは星とあやまたれけり

広東。其名の高き広東水上生活。人口一五〇万中八〇万を数う。

マニラ（フィリピン）、セレベス島、ニューギニヤ海。

木曜島（濠州北端）着岸

タウンズビル

プリズベーン

シドニー

シドニー行路所見

「五月」二日曇、午前虹霓一弓、驟雨一過、南風冷を送り秋気船窓に入るの心地あり。又晩に船欄に倚れば新月の西天に印するを見る、亦大に幽趣あり。

濠陽風物動吟情 晚倚船欄弄遠望

日没西山天來暮 一痕新月印空明

又別に三十一文字一首を浮かぶ

南極のま近くなりししるしにや彼方よりくる風の涼しさ

タスマニア島 ホバート

五月二〇日

思ひきや同じ月日の照る国で五月の頃に菊を見んとは

南阿ダルバン港の実況

ダルバン市は人口七萬人其中歐人一万九、〇〇〇人、土人一万八、〇〇〇人、印度人及び他の亜細亞人一万八、〇〇〇人なり、歐人は大半英人にして之れに次ぐもの蘭人其他各国人とす、多少の猶太人も之れに加はる印度人中には婆羅教徒、回教徒、火教徒あり、其他にはマレー人、支那人、アラビヤ人等ありて労働に従事せるが其各種及び土人の間の紛争絶えずといふ、日本人は四五人此市にありて洗濯業に従事すと聞けり、先ず当地の奇觀を挙げれば人力車の右に出づるものなし、車の大きさは我邦の二倍ありて、二人は勿論三人同乗することを得べく極めて粗大なり其中比較的美なるものには歐人のみに用ふるの符号を記す而して之を曳く車夫はすべて黒奴なり、頭上に異種の冠をいただく、其兩角には水牛の角をつけ、中央に鶏の羽を飾りたて、腰の周囲には赤きキレを垂れ脚には或いはゴフンを塗るありて一見鬼の如き装をなす。

電車は二階付にしてホバート式なり乗車賃一哩八錢二哩一六錢とす、波頭場より市中まで約一哩あり市街は大ならず、家屋は高からずと雖もすべて歐洲式なり、但し屋上はトダン葺のみ市廳と郵便局を除きては觀るべき建築なし而して市街に小邱を繞らし中間に海湾を挟み頗る風光に富む、殊に目下三冬の節に當るにもかかはらず其氣候は台湾南部の冬期と同じく綠葉紅花到處に満つ就中猩々木の各處に繁生して霜後の楓葉よりも赤し此に住するものはみな夏服のみを用ふ着岸後歩を市中に散するに日曜にて諸店を閉鎖す、夜に入りて帰船すれば一天片雲なく満月橋頭にかかり蟲聲露光恰も我三五の明月を望むが如く壮快極りなく吟情勃然として動く。

アフリカの潮風あらし海の上も月の光はかはらざりけり

すみ渡る今宵の月に照されて黒奴の家も賑ひにけり

九月二三日晴 朝六時リオ都に帰着す、につづき

◎「六三」 コント教会を訪問す、の節に注目しよう。

九月二四日（日曜）曇、午前田邊氏の案内にて佛国大家コントの教会ポシチビストの会堂に到る。会長チセラメ
ンデス氏の説教中なり、会堂は凡そ百坪ありて数一〇〇人を收容すべきも当日の参衆は総計五二人、内女子八人の
み、是より博物館に移る、目下修繕中にて閉鎖す、館後の水族館を一見して帰る其周囲は当地第一の公園にして人
工を以て風致を装い竹林の隧道の形をなせるあり。……

午後再びポシチビズム会堂に至りて会長に面会す、其語る所によるとポシチビストの主義は其本国の佛国には却
て振はず、現に会堂を設けて布教する處は英京龍動とリバプールと南米リオとの三ヶ所のみ、其中リバプールは龍
動よりも盛んにリオはリバプールよりも盛んなり、全世界のコント教会中リオ教会が第一に位す此教会に加はるも
のは成るべく肉食を廃して菜食するを期す飲酒は一切之を禁じ珈琲及び茶も吞まざるをよしとす、飲用は牛乳と湯
水と限る、但し強制するにあらず、戦争を厭忌し平和を主張す自衛の為に他国と戦うは今日の勢萬止むを得ずとす
るも自国の膨張を図らん為に他の国を侵奪せんとするは絶対的に反対なり、會員の結婚式及び葬式は此会堂に於て
行ふ結婚式は男初めに女の前に跪きて誓ひ、女次に男の前に跪きて誓ふ一たび結婚すれば夫婦の間孰れが先に死す
るも再婚を許さずといふ、リオの市中に会員一百名賛成者二百名あるのみ、其数僅少なるも中等以上の教育ある社
会なれば比較的勢力を有し、政治上問題の起る毎に必ず其意見を此教会に質し之を新聞上にて公表する由蓋し會員
の少なきは其規律の厳に過ぐる為ならん。

南半球に来て眺める夜夜の月の位置、月名と季節のちがいに覚える新鮮なおどろき、などは我身の経験に照らしても、入念に記しておきたくなる旅感覚である。また、われわれの記憶に生々しい先頃のイギリス・アルゼンチン戦争（そのイギリスはもはや七つの海を支配する大英帝国ではない）の舞台、フォークランドの記述には誰しも意表をつかれるのではないか。大西洋時代（近代、イギリス、工業社会）から太平洋時代（現代、日本、情報社会）——この観念連合図式を私は屢々活用している——への移りゆきを象徴するこの地であるが、当時としてはまさに僻遠の地を旅する円了の心のながしのばれる。

前述の如く大部分が船旅であった。今日ではわれわれは船旅の機会を、ジェット機のスピードに頼らざるをえない状況のなかで持ちがたくなっている。船旅それ自体を目的とする（M・ウェーバー的用語でいえば、船旅を zweckrational から wertrational に代える）のでない限りは、船旅はとれない。円了にとっては船旅はもっぱら zweckrational なものであつたらう。船窓をみつめ、船窓の彼方のものをみつめ、そうしながら去来する胸のなかのものをみつめながらする旅、それはジェット機のスピードによる旅を、求めて予期するでもなく、旅というものの当然の現実として遂行した船旅であった。一転それはしかし、時として wertrational な瞬間として立ち現れたでもあろう。世界に対する、人生に対する深い考察の瞬間と化したであらう。

船窓をみつめる彼の胸に去来した「哲学館事件」の意味、とその対象化、また矮小化、「修身教会」への発展の意味とその対象化、またその今後への位置づけ、などなど。われわれの nachreisen もそのようにうごく。

哲学館事件、あれは何であつたのか。かれは当時の新聞をとり出し、一目みてまたそれを胸のポケットにしまう nachreisen はそれを追いたくおもうが、ここではひとまず措く。

船窓の旅は終わりに近づき、かれはこの第三次の旅に先立つ第一次、第二次の旅をおもい起こしている。（この日

程は同じくこの本の末尾に記されている。

第一次——

アメリカ及びカナダ——サンフランシスコ、ソルトレーキ市、デンバー町、オマハー町、シカゴ市、シヤトル市、
ナイヤガラ)

イギリス——ロンドン市、リバプール市、マンチェスター市、オクスフォード町、ケンブリッジ町、ボンマウス
町、サリスバリ町、ヨーク町、ニューカッスル町、……

スコットランド——エジンバルフ市、グラスゴー市

フランス——パリ市、ベルサエ町、マルセール市

ドイツ——ベルリン市、ドレスデン市、ポーツダム町、コローン町

オーストリー——ウィーン市

イタリア——ローマ市、チューリン市、ゼノア市、フロレンス市、ボローナ市、ベニス市

エジプト——アレキサンドリヤ、スエズ

アラビヤ——アデン港

インド方面——セーロン島、シンガポール

安南(インドシナ)——サイゴン市

シナ——香港、上海

第二次——

シナー上海、香港

マレー半島——シंगाポール、ペナン

インド——カルカタ、ダジャーリン、バンキブル、ガヤ、ブタガヤ、ベレナレス、アラハバット、ボンベ

アラビヤ——アデン

エジプト——スエズ

スペイン——ジブラルタル

イギリス——ロンドン、ブライトン、ヘスチングス、カンタバリー、プリストル、バス、ボルミンハム、チェス

ター、ソーズ、ブラッドフォード、ベルレー、イルクリー、リボン

威士——バンゴル、カールナーボン、スノードン

スコットランド——エジンバルフ、アバデー、インバエス、ストラスベッフェル

アイルランド——ダブリン、ベルファスト、ロンドンデリー、ポルトラッシュ、ジャイアントコースウエー、ポ

ルタダウン

フランス——パリ、マルセール

ベルギー——ブラッセル、アントワープ、オステンド

オランダ——アムステルダム、ロッテルダム

ドイツ——ベルリン、ライプツヒ、コイニヒスベルヒ、ウイテンベルヒ、フランクフォルト

スイス——バーゼル、ツリーヒ、ルセルン

アメリカ及びカナダ——ボストン、ケンブリッジ、バッファロー、シカゴ、セントポール、シャートル、バンクーバー

◎付、第三次——

シナ——香港、広東

南洋——マニラ

オヘストラリヤ——シドニー、メルボルン、木曜島、タウンズビル、プリズベーン、クロイドン、パラマタ、ブ

ライトンビーチ、サンドリンカム、ヒールズビル、ウイリヤムスタウン、ホバート、アルバニー

南阿——ダルバン、ケープタウン

アフリカ離島——ラパルス、セントビンセン

イギリス——ロンドン、リバプール、ストラトフォールド、グランサム、ウールズソルプ、グリムスビー、セント

ジャイル

ノールウエイ——クリスチャニア、トロンジーム、トロカーデン、トロンソー、リンデン、ハンマーフェスト、

ノルドカップ、ボスコップ、ジゲルミュレレン、アンタルスナス、モルド、ベルゲン

スエーデン——ストックホルム、マルモ

デンマーク——コッペンハゲン

ドイツ——ベルリン、ライプツヒ、ミュンヘン

スイス——ツーリヒ、ベルン、ローザン、ゼネブ

フランス——パリ、リオン、ロシエール

スペイン——コルナ、ビゴ

ポルトガル——リスボン、レキツス

ブラジル——リオジャネロ、ペトロポリス、サンパウロ、ガタバラ、サントス

アルゼンチン——ブイノスアイレス、チグレ、ラプラタ、リオサンチャゴ

ウルグアイ——モレテビデオ

フォ克蘭ド島——スタンレー

チリ——サンチャゴ、バルバライソ、パンタアレナス、コロネル、タルカノー、サンベルナドン、ベレケン、ロ

スアンデス、イキケ

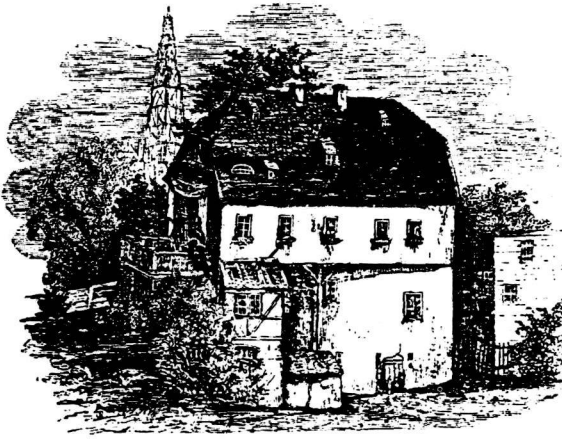
ペルー——リマ、カイヤオ、クララ

メキシコ——サリナクルス、マンサニオ

ハワイ島——ホノルル、パリ、ワイパフ



われわれは第二次のコヒニヒスベルヒすなわち Kingsberg (ケーニヒスベルク) に目をとめることになる。カントの生都にして研究と教授生活を送った町——上掲カットはカントの邸宅——。ここに円了は一九〇二年に訪れた。これは巡礼であったのか。或いはほかにどういふ気持ちを抱いてであったか。いま、ケープタウン、北極圏、フォ克蘭ドを遍歴する円了はこの巡礼とこの遍歴とをどういふ気持ちで結びつけているであろうか。或る種の矛盾的



ケーニヒスベルクのカントの邸宅

発展を意識しているのか、一層の調和円現の法則のなかにいるのか。調和もよし、されど矛盾もよしというべきか。というのは矛盾的關係のなかにこそ最高の自由が存するのだから。

○人名・地名に関しては、いくらかの箇所では現在の表記法になおしたほかは、原文のままになっていることを付記しておく。また仮名づかいについても原文引用においてはもとのまま。